AH!! HOKURIKU

第 27 号

本泉寺山門（金沢市）

支部ニュース「ＡＨ！」の第２７号をお届けいたします。

“あかり”による街づくり

“あかり”は人々の夜の賑わいを促す装置として欠かせないものとなっている。金沢でも石川門や尾山神社、県立歴史博物館などのライトアップはよく知られており、金沢の歴史名所を夜間でも楽しめるようになっている。しかし、これらを見学に行ってふと気付くのは、そこに至るルートの歩道沿いがやけに暗いということである。そのような道々を仕事帰りや学校帰りの人達が危険を回避するようにそそくさと家路を急ぐ。

日常的に街中を回遊する人々にとって必要なのは、華やかなライトアップよりも、足元や人々の顔を優しく照らしてくれるあかり、歩道沿いの用水や石畳、自然の風情を感じさせてくれるあかりなどではないだろうか。今年の４月のとある夜、主計町で、一軒の茶屋の２階から漏れた光が路地の中央に咲く桜の花を美しく照らし、そこに三味線の音色や舞妓さんの歌声が響いている場面に遭遇し、新鮮な感動を覚えた。金沢に住んで６年以上経つが、その時ほど金沢らしさを感じた瞬間は他にない。金沢の街並み、建築、あかり、自然、音楽、人々の営みが渾然一体となっていた。昔の人々はこのような情景をどう受け止めていたのだろうか。

最近の金沢では、モダンと和が融合した新しいスタイルの飲食店が増え、照明を巧みに使った外観デザインで道行く人々の目を楽しませ、集客をはかっている店舗の存在が目立つ。金沢の人々の、夜を楽しむ気質が現代の街で新しい姿として現れてきているのであろうか。

10 月 15～17 日には昨年に引き続き、第２回目となる金沢工業大学建築系の学生達の手による“あかり”のプロジェクトが金沢市中心部の広坂周辺で行われる。100 名近くの学生達の手作りによる大小の光のオブジェは道行く人々の足元や広場を照らし出し、夜の街に少なからず賑わいをもたらすであろう。

どのような形、質であるにしても、“あかり”は都市・建築・街路といったハードの空間と、人々の日常におけるソフトの営みを繋ぐ掛け橋である。今後の都市の活性化においては“あかり”という視点は欠かせないであろう。しかし、単なる夜景の美しさや華やかさだけでなく、金沢らしさとは何かということを常に意識して考えていく必要があるような気がしている。

（金沢工業大学建築学科講師
下川　雄一）

駅前で「建築とまちづくり展」

福井で「建築とまちづくり展覧会」が開催された。建築実務家や学生が、建築とまちづくりの提案をパネルや模型で展示し、市民に訴えたもの。１０月２８日から１１月３日まで、福井駅前の市民ギャラリー「えきまえ KOOCAN」で行われ、２００人を越える来場者があった。

展示されたのは、地元の木で家を作る提案、省エネ住宅、ログハウス、街なかのアトリエなど建築単体の提案や、ビル壁面緑化グッズ提案、足羽川遊水池計画、雑木林を市民憩いの場にする提案、空き店舗を活用しての商店街活性化提案、集まって住むコレクティブ住宅提案等のまちづくり提案。

遊水池提案は本年７月の福井豪雨水害で破堤した足羽川に、大型ダム計画が再浮上したのに対して、「ダムでなく遊水池で水害を防ごう」と提案したタイムリーな計画。また、雑木林や空き店舗（たわら屋）のパネルは提案であると同時にすでに福井大の学生を中心に活発に展開されている活動紹介であり、コレクティブ提案はすでに有志が集まり、ある程度実現性のある計画で、市民の関心を集めたようである。

来場者アンケートで見ると、全体として良かった（面白かった）が６６％中に少し面白いのがあった：２６％、面白いものはなかった：ゼロ。また、こういう展覧会は毎年開いたらよいと思う：５１％、毎年でなくても良いがたまには開いたら良いと思う：２１％等の反響から、こうした展覧会が歓迎され期待されていることが感じられる。

この展覧会を企画したのは新建築家技術者集団（新建）福井支部（代表：桜井康宏）であるが、同支部はしばらく休会の後、本年１月再建された。建築学会や建築士会と重なるメンバーが多い運動組織で、７０年代には県庁舎立地問題で独自提案をした経緯もあり、今後の活動が注目される。筆者も学会と新建双方に籍を持つ者として来年は「建築とまちづくり展覧会」のような企画は両団体共同で取り組みたいと考えている。　（福井大学　本多昭一）

建築とまちづくり展の様子

たわら屋～福井大学研究室＆田原町商店街振興組合協働事業～

『たわら屋』は平成１５年１０月より福井市空き店舗活性化事業の一環として始動し、平成１６年６月１５日にオープン。たわら屋は基本柱［交流・情報発信・自己表現・発表］の３つを掲げ、様々な仕掛けを行っている。現在までに 21 ものイベントを行ってきたが、イベントを通して買い物機能以上のつながりが地域住民と学生、商店街と少しずつ形成されつつある。また 12 名の学生が交代で常駐することで、日頃から地域との交流を図っているのも特徴である。

▲商店街にある銭湯の女湯壁画に学生がペイント。（学生の発表の場として）次回男湯壁画制作予定。

▲全国都市再生モデル調査事業。商店街の料理屋さんに先生となってもらい料理教室を開催。

▲パソコンサロン毎月第 1,3 月曜日にパソコンサロンを開催。お年寄りの参加者が多い。

富山　支所だより

最近思うこと

私が会社に入ったのは昭和４３年で以降オイルショックなどもあったが、高度成長の流れもあり平成のバブル崩壊までは、一応良き建設業界であったように思う。

その中で自分の仕事は大半が見積もり業務であったので、最近特に感じるのは近年変わってきている入札制度の事である。

一つめは応札の要件であるが用途、面積、構造等の経験者の多様な条件を必要とされていることが非常に多くなってきている。今までは一級建築士、一級施工管理技士の資格と経験年数でよかったものが、それ以上の条件とは国家資格が軽んじられているか又は特定の業者を想定しているのではとさえ思う。

二つめは予定価格のことだが、最近は公表されることも多くなっているが、公表されるもの、そうでないものを含めて、予定価格が正しいものであれば良いが、中央官庁は別として地方自治体等では設計と予算の乖離があるもの、単に予算を大幅にカットしたもの等が多々あるように思われる。入札価格が公表されているものは特に予定価格以下で応札しなければならず、意義を唱える事が出来ないのが現状である。

公共工事量はここ数年の間にピーク時の６割近くまで減ってきている。民間工事の工事量についても同様である。工事量の減少の大きい割には建設業者の数はそれほど減ってはいない。

債権放棄を受けた会社を含めて民間工事ではダンピング競争をし続けているため、各社の受注は一部のスーパーゼネコンを除いて減っている。ゼネコン、サブコン、専門業者は工事費を下げる為に省力化等合理化を進め、最終的には賃金まで減らして努力しているのが現状である。建設特に建築の業者は数パーセントの利益を出すのに必死である。

官公庁、建築主、設計事務所、建設業者共適正価格なるものをもう一度考えるべきではないだろうか。　（ゼネコン勤務　宮田俊康）

新潟　支所だより

日々是「提案」

ウィークディの激務から開放されてようやく休日！さあ、ねるぞ！というのが、まあ私にとって普通の休日のあり方ですが、ある時少しパターンを変えてみました。5 歳の息子に「はい、これスケッチブックと鉛筆。100 均のだけど 36 色のペン。さ、いくよ」「どこへ？」「いーから」・・・「かっこいい建物をみつけてごらん」「あ、これいいねー」息子が目をつけたのは近くのスパゲッティ屋さん。おもむろに駐車場に腰を下ろして、2 人ならんでサラサラとファサードのスケッチ開始。5 歳のクセに以外にウマイなぁ。ちゃんと建物になってる。いい建築家になるぞ。まだ色は塗らずにそのままスーパーの喫茶コーナーに行く。パパのエスプレッソはあげないが、息子のソフトクリームは一口もらう。そしておもむろにコピックを取り出して彩色。できた！帰ったら壁に貼ろうね。きっとママもほめてくれるよ！

話は変わって、今年度前期、本学建築学科主催で住宅コンペを開催しました。実際の施主さんと敷地を対象に、学生からプランを募集したところ任意で 100 編以上の作品が集まり、柏崎駅前のスーパーの一角を借りて展示会。買い物にこられたお客さんから多数投票してもらって優秀作品を決めたりと大いに盛り上がりました。この企画は既に今年 3 回目。施主を見つけるのは骨が折れますが、学生たちにとっては「自分の提案した建物が建つかもしれない」という期待で面白がって取り組むから、いいものがバンバン出てきます。「スケッチしに行くぞ」「温泉に行くぞ」「遊園地に行こう」「住宅コンペやるぞ」「こんな住宅はどうだ」・・・どんな世界でも「こうしたらいいんじゃないかな」というのを情報発信してみると、家庭も職場も一気に明るくなります。明るい顔で言ってみて、周りがそれに乗ってきたらしめたもの。もちろん、元気のない人や気の合わない人、世の中いろいろなわけですが、悪口言ったりこき下ろしたりじゃなくて、こんなのはどう？という「提案」型の会話で物事を進めていくと、毎日がとても楽しくなりますね。

さて、新潟県中越地震から１ヶ月、被災状況は今も連日 TV などで放映されているとおりです。ボランティアの方々は炊き出し、洗濯、トイレ掃除、被災者の話し相手と、自身ができることは何かを常に模索しながら動かれています。そして、現地に来られなくても物資提供や義援金という形で協力されている方々も数え切れません。そう、「私にはこんなことができますよ」という一つ一つの「提案」は、どれほど被災者の方々を勇気付けているか計り知れません。建築の一端に携わるものとして、また大学教員として私自身すべきことは多々ありそうです。私の立場で何が提案できるのだろう、と自問自答の日々が続いています。　　（新潟工科大学　飯野秋成）

長野　支所だより

己か巳か

先日、ある筋から指摘を受け、堀口捨「己」か、堀口捨「巳」かを調べる機会があった。

日本分離派建築会の主要メンバーにして茶室研究の第一人者にして尖石縄文考古館の広場にある与助尾根遺跡の竪穴復元住居の復元設計を手がけ、戦国期の「洛中洛外図屏風」の研究ではいまなお参照に値する、あの、堀口捨己さんだ。

「己を捨てる」と書いて捨己．．．なんという禁欲的な名前。かっこうよすぎ。ところが、ここにいたって「巳を捨てる」ではないかという疑惑。「捨」については、秀吉の子、棄丸（1589-1592）と同様に、捨て子の習俗（儀礼）が参考になる（柳田國男「親方子方」ステゴオヤの項）。

捨己にちがいないとタカをくくっていた矢先、太田博太郎『日本建築史序説（増補第 2 版）』が複数箇所で「堀口捨巳」と表記しているのを偶然、みつけてしまった。なんだかんだいってもこの書の影響力は大きい。にわかに捨巳説があたまをもたげてくる。

ここで、「捨巳」と名付けられる可能性について考えたい。それは、うまれ年の干支だ。

奈良県戦捷記念図書館の設計者、橋本卯兵衛（1855-?）はウサギ年うまれだ。

初期 RC 造のデザインに取り組んだ遠藤於菟（1865-1953）はウサギ年うまれではなかった。まぁ、こういうこともある。

西山夘三（1911-1994）はウサギ年うまれではない。そもそも、夘と卯は似ているが違う。

明治のステンドグラス職人、山本辰雄（1867-1911）はタツ年うまれではなった。これは意外だ。

宮内省で片山東熊の部下だった足立鳩吉（1858-?）はトリ年うまれではなった。むしろ、こうなったら東熊だ。片山東熊（1853-1917）はウシ年うまれで、熊のどっしり感は牛ゆずりといえる。ちなみに山口文象（1902-1978）はトラ年うまれで、虎と象はインドのイメージだ。

建築評論家、板垣鷹穂（1894-1966）はトリ年うまれではない。鳩や鷹をトリと見なしたのが誤りか。

藤島亥治郎（1899-2002）はイノシシ年うまれだ。

以上のように、じつは名前に込められた動物とうまれ年の干支は、想定したほどの関係がなかった。しかし本題に戻ろう。

堀口捨己（1895-1984）さんはヘビ年うまれではなかった。命名と干支があまり関係がないことがわかった以上、この結果をもって捨巳説を棄却するにはいたらない。いえることは、だからなんだ、ということだ。

さて、『堀口捨己の「日本」』（彰国社）より、捨己さんの 10 歳年上お兄さんは「由己」さんという情報を得た。兄弟そろって「己」の字を用いているとは、ありうべき話だ。しかし、この兄の名前すら、「由巳」の誤植である疑いは拭いきれない。そんなとき同書で、1919 年・東京帝国大学工科大学第 3 学年当時の製図の作品（明治大学所蔵）の隅に鉛筆書きの記名をみつけた。

（信州大学工学部　早見洋平）

シリーズ隠された建築紹介　本泉寺山門

松扉山本泉寺は金沢市の東部，医王山の麓に位置する真宗大谷派の寺院であり，二俣御坊として知られる古刹である。現在の二俣は山間の小村であるが，当時は越中加賀交通の一要地であった。嘉吉 2（1442）年，本願寺六世巧如の第三子で井波瑞泉寺の二世でもある如乗がこの地に本寺を開創し，両寺の住職を兼任した。如乗は本願寺八世蓮如の叔父に当たり，蓮如の法主就任にあたり大きな役割を果たした人物であることから，本寺は蓮如との繋がりが深い。文明年間に蓮如が滞在した際に，本堂の背後に九泉八海の庭（県指定名勝）を作庭したのを始め，同寺の住職は代々蓮如の実子が務めた。加賀一向一揆においては，松岡寺（能美郡波佐谷）・光教寺（江沼郡山田）と共に加賀三ヶ寺と称し，真宗勢力の中心の一つであった。また，本泉寺の支坊の一つ土山坊は，後に移転して勝興寺（富山県高岡市）となる。

こうした名刹であるが，たびたび戦渦に遭ったことが災いし，現在ある堂宇はそのほとんどが幕末以降に建てられたものである。その中でもっとも古い建物が，文政 6（1823）年建立の山門である。

山門は一間一戸の二階二重門で，参道の長い石段のすぐ上に建つ。様式は禅宗様で，組物は出組とする。二軒繁垂木の軒は上下とも深く，江戸後期の門としては均整のとれた美しいプロポーションをしている。特に注目すべきは，左右の脇羽目に施された一対の彫刻である。彫刻の題材として，正面向かって右手に獅子の子落とし，左手に鯉の滝登りが描かれている。これは，瑞泉寺勅使門（富山県砺波郡井波町・寛政 4（1792）年・町指定）の脇羽目彫刻と題材が共通し，構図や表現技法も酷似している（ただし瑞泉寺は左右とも獅子の子落とし）。瑞泉寺勅使門の彫刻は，同寺の宝暦大火後の再建において京都の本願寺御用彫刻大工・前川三四郎に学んだ田村七左衛門（1757-1800）の作とされ，井波彫刻初期の代表作として名高いものである。また，両寺院は開創時より深い関係がある。本泉寺山門の建立は瑞泉寺勅使門よりおよそ 30 年下るが，前者の彫刻が後者に影響を受けて作成されたことはまず疑いなく，田村七左衛門と近い関係にある井波大工の手によるものと考えられる。

なお，境内にある手水舎は，三本の柱で三角平面の屋根を構え，その下に四角い手水鉢を備える奇妙な建物である。明治 5（1872）年に出入りの大工・石崎清左衛門によって建てられ，手水鉢は明治 10 年 8 月に寄進された。三角形の特異な平面形状，丸桁を支えるアーチ状の梁などは擬洋風な要素とも考えられ，明治初期の新しい建築様式への取り組みの表れとして評価できる。

（金沢工業大学建築都市デザイン学科講師　山崎　幹泰）

いきいき街づくり　柏崎市　科学とまちづくり

最近，科学技術に興味関心を持っている子供が少なくなっています。柏崎市では、実験や考察を通して科学に興味を持ってもらうためにジュニアサイエンスアカデミーや青少年のための科学の祭典など科学に関するイベントが毎年行われています。この他にも、大学と企業等からの共同研究などで地域との交流が行われています。

飯野研究室では2004年11月20日～21日に新潟工科大学で行われた青少年のための科学の祭典に「赤外線プリクラ」を楽しもう！で参加しました。これは、赤外線放射カメラで自分の顔を撮影して、写真をシールにして渡すというものです。子供たちは赤外線放射カメラで撮影した画像を見たことがないため、モニタを不思議そうに見ていたり、カメラの前でポーズを取ったりして楽しんでいました。特にプリクラを受け取って嬉しそうにしている顔が印象的でした。また、指導する立場として子供たちに物事をわかりやすく教えることの難しさを知るいい機会になりました。

「まちづくり」というと歴史的文化財の保存や住みよい環境を考えるというアプローチが多いですが，このようなイベントなど他のまちと違ったアプローチからまちづくりを試みることも大切だと思いました。

（新潟工科大学大学院　塚本健二）

「青少年のための科学の祭典」の実験の様子

日本建築学会北陸ニュース「AH！」第 27 号
発行日　2004年 12 月1日発行
発　行　日本建築学会北陸支部広報部会
飯野　秋成(新潟)　　玉井　泰子(富山)
早見　洋平(長野)　　山崎　幹泰(石川)
薬袋　奈美子(福井)
事務局　白井　　考・瀬口さゆり
〒920-0863　金沢市玉川町 15-1、ﾊﾟｰｸｻｲﾄﾞﾋﾞﾙ 3F
TEL＆FAX　076-220-5566